青森県総合学校教育センター　研究紀要［2011.3］
Ｇ９－０１

高等学校　英語

新学習指導要領に対応した授業の在り方についての考察
－高等学校外国語（英語）の授業における望ましい言語活動－

高校教育課　　指導主事　　對　馬　　信　之

要　　旨

県内県立高等学校（全日制）の英語の授業方法について現状を把握する目的で実施したアンケート調査の結果を分析したところ，平成21年３月に告示された高等学校学習指導要領（以下「新学習指導要領」とする。）に対応した授業を行うためには自分の考えを英語で表現する言語活動を取り入れる必要があると考えた。そこでペアワークやグループワークにより生徒が自分の考えを相手に伝える生徒主体・活動中心の授業の在り方について考察する。

キーワード：高等学校　新学習指導要領　ペアワーク　グループワーク　「発信力」の育成

Ⅰ　主題設定の理由

平成20年１月の中央教育審議会による「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」では，外国語科教育の課題として「コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』の育成」が必要であると指摘されている。英語Ⅰ及びⅡの授業で現在行っている授業方法を把握することにより，どのような言語活動を加えたら新学習指導要領に対応した授業ができるのかを提案するために本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

平成25年度から実施される高等学校の新学習指導要領において，英語の各科目における言語活動は原則として英語で行うことが明記されている。県内高校の授業方法の現状を把握した上で，望ましい指導方法について考察する。

Ⅲ　研究の実際とその考察

１　アンケート調査の概要

(1) 対象

県内県立高等学校（全日制）のうち，ALT が常駐する28校の英語Ⅰ及び英語Ⅱの授業担当者各１名，計56名。

(2) 方法

選択式（一部記述式）

(3) 回収率

100%（対象とした56名の全教職員から回答が得られた。）

２　アンケート調査の回答結果と現状分析等について

(1) 英語Ⅰ(図１)及び英語Ⅱ(図２)の授業中生徒に指示を出すとき（複数回答可）

①日本語で指示を出す。(英語Ⅰ22名　英語Ⅱ19名)
②英語で指示を出し，伝わらない時は日本語で補足説明する。(英語Ⅰ15名　英語Ⅱ13名)
③英語で指示を出し，伝わらない時は別の英語の表現で補足説明する。(英語Ⅰ３名　英語Ⅱ２名)
④その他(英語Ⅰ２名　英語Ⅱ１名)

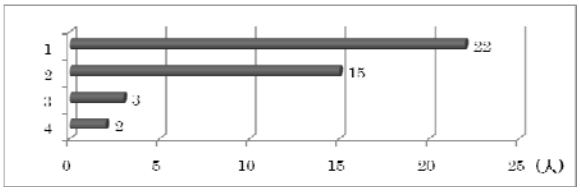


図１　英語Ⅰにおける生徒への指示

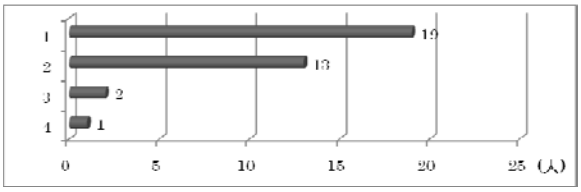


図２　英語Ⅱにおける生徒への指示

(1) の質問は英語Ⅰ及び英語Ⅱの授業中，生徒に指示を出すとき英語で指示を出しているかどうか確認するためのものであった。新学習指導要領第３款「英語に関する各科目に共通する内容等」の４には「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮するものとする」とある。このことは，英語の授業中に教師がすべての指示を英語で出し，説明をすべて英語で行うことを必ずしも意味しないものの，生徒が英語をできるだけ聞く機会が増える等の効果が期待される場面では，クラスルームイングリッシュをできるだけ活用したいところである。

(2) 英語Ⅰの授業で，教科書本文の事物に関する紹介や対話などを聞かせるとき（複数回答可）(図３)

①情報と考え，あるいは事実と意見とを区別させながら英語を聞かせている。(12名)
②ワークシートを活用し，聞き取るべきポイントを明示したうえで英語を聞かせている。（２名）
③話題から概要・要点を推測させながら英語を聞かせている。(13名)
④その他（３名）

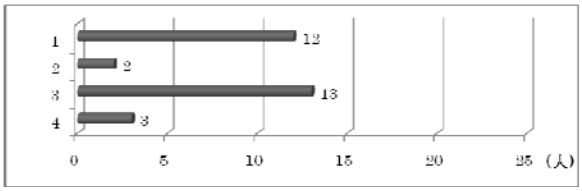


図３　英語Ⅰにおけるリスニング活動

(2) ②「ワークシートを活用し，聞き取るべきポイントを明示したうえで英語を聞かせている」との回答数は28名中２名であった。コミュニケーション英語Ⅰでは概要や要点をとらえることが目標となるため，新学習指導要領に対応した授業を行うためには，要約を積極的に活用する必要があると考える。

(3) 英語Ⅱの授業で，教科書本文の事物に関する紹介や報告，対話や討論などを聞く活動について（複数回答可）(図４)

①英語で行われる討論を聞いて情報や考えを聞き取らせている。(14名)
②①の情報や考えを整理して自分の考えをまとめさせている。（５名）
③②の自分の考えに理由をつけて話し合わせている。（２名）
④③の活動に関して，相手の意見に対する自分の意見を発表させている。（０名）
⑤その他（２名）

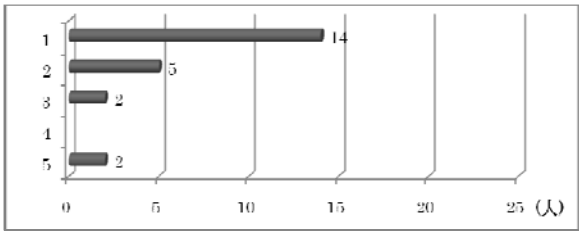


図４　英語Ⅱにおける話し合いの活動

(3) ①「英語で行われる討論を聞いて情報や考えを聞きとらせている」との回答数は28名中14名であったものの，聞き取った情報や考えに対して自分の考えをまとめたり自分の考えを話し合ったりするとの回答数は少なかった。コミュニケーション英語Ⅰでは，聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどについて話し合ったり意見の交換をしたりする言語活動を取り入れる必要がある。また，コミュニケーション英語Ⅱの指導においては，聞いたり読んだりしたこと，学んだことや経験したことに基づき，情報や考えなどについて話し合うなどして結論をまとめる言語活動を取り入れる必要がある。以上のことから，新学習指導要領に対応した授業を行うためには，自分の考えを英語で表現し，さらに相手の考えを聞く言語活動を取り入れる必要があると考える。

(4) 英語Ⅰ(図５)及び英語Ⅱ(図６)の授業で，教科書本文の導入の際に行う活動について（複数回答可）

①題目（英語Ⅱでは題目・挿絵・写真等）から内容を予測させている。(英語Ⅰ19名　英語Ⅱ18名)
②本文に関する質問を英語で尋ね，英語で答えさせている。(英語Ⅰ17名　英語Ⅱ20名)
③本文の要約を英語で聞かせている。(英語Ⅰ２名　英語Ⅱ１名)
④その他(英語Ⅰ０名　英語Ⅱ１名)

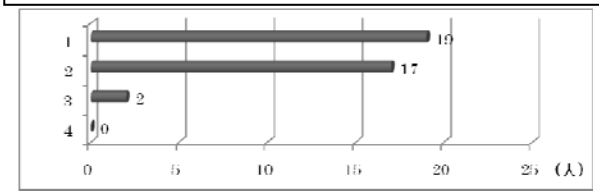


図５　英語Ⅰにおける導入時の活動

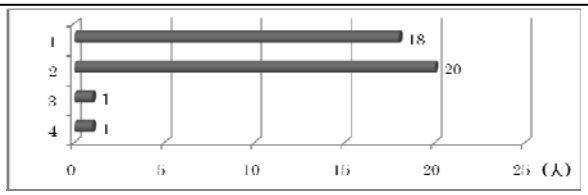


図６　英語Ⅱにおける導入時の活動

(4) ③「本文の要約を英語で聞かせている」との回答数は英語Ⅰでは２名，英語Ⅱでは１名であった。アンケートの自由記述において，導入の際にキーワードが書かれたフラッシュカードを用いて反復練習を行った後，授業の最後でフラッシュカードを用いて本文を要約する活動が挙げられていた。このようにキーワードやキーセンテンスを用いて本文を要約する言語活動を取り入れることは新学習指導要領に対応した授業をする一つの有効な方法なのではないかと考える。

(5) 英語Ⅰ(図７)及び英語Ⅱ(図８)の授業で，教科書本文の単語の発音練習や，英文の朗読を行う活動について（複数回答可）

①リズム・イントネーションに注意して英語を聞かせた上で音読させている。(英語Ⅰ19名　英語Ⅱ24名)
②話す速度に注意して英語を音読させている。(英語Ⅰ11名　英語Ⅱ14名)
③CDまたはALT の発音を聞かせている。(英語Ⅰ22名　英語Ⅱ19名)
④その他(英語Ⅰ１名　英語Ⅱ１名)

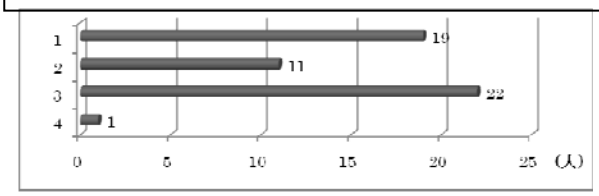


図７　英語Ⅰにおける音読活動

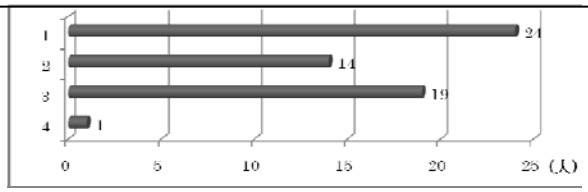


図８　英語Ⅱにおける音読活動

(5) の質問に対する回答から，各学校の現状に応じて音読活動を行う際には様々な工夫がなされていることがわかった。その一方で，コミュニケーション英語Ⅱで行う言語活動の中では聞き手に伝わるように暗唱を行うことも必要とされるため，暗唱の指導を指導計画の中に積極的に取り入れる必要がある。

(6) 英語Ⅰの授業で教科書本文の内容を理解させる活動について（複数回答可)(図９)

①各段落の要点を表す語句を探させている。(７名)
②各段落の要点を表す文を探させている。(11名)
③本文の話題に関する基本的な表現を確認させている。(21名)
④事実と意見を区別させながら本文を理解させている。(１名)
⑤その他(０名)

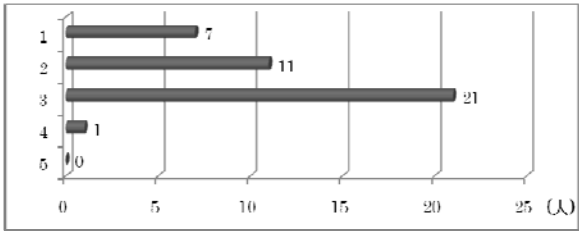


図９　英語Ⅰにおける内容理解のための活動

(6) ③「本文の話題に関する基本的な表現を確認させている」との回答数は28名中21名であった。このことは新学習指導要領に移行した後も引き続き必要な指導であるものの，コミュニケーション英語Ⅰの指導目標は概要や要点をとらえることが目標となることを考えると，①や②のような各段落の要点を表す語句や文を探す言語活動を一層充実させることが必要であると考える。

(7) 英語Ⅰの授業で，教科書本文の内容を理解させた後で行う活動について（複数回答可）(図10)

①本文に関する質問を日本語で行い，日本語で答えさせている。(15名)
②本文に関する質問を日本語で行い，英語で答えさせている。(６名)
③本文に関する質問を英語で行い，日本語で答えさせている。(10名)
④本文に関する質問を英語で行い，英語で答えさせている。(17名)
⑤ワークシートを活用し，日本語で空所を補いながら要点をまとめさせている。(７名)
⑥ワークシートを活用し，英語で空所を補いながら要点をまとめさせている。(11名)
⑦その他(０名)

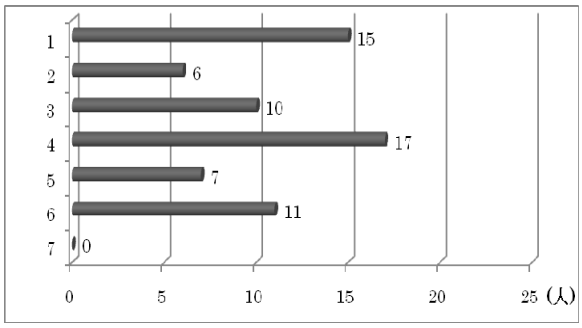


図10　英語Ⅰにおける内容理解後の活動

(7) ⑥「ワークシートを活用し，英語で空所を補いながら要点をまとめさせている」との回答数は11名とあまり多くなかった。コミュニケーション英語Ⅰを指導する際には，生徒が教科書本文を詳細に理解することに終始するのではなく，生徒がワークシートを活用することで内容理解のための時間を節約し，英語で自分の考えを表現する言語活動を行う時間を十分確保する必要があると考える。

(8) 英語Ⅱの授業で，教科書本文の内容を速読させる活動について（複数回答可）(図11)

①各段落の要点を表す語句を探させている。(12名)
②各段落の主題文・事実・意見を把握させている。(16名)
③各段落同士の関係について考えさせている。(８名)
④その他(０名)

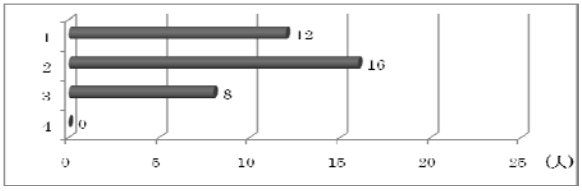


図11　英語Ⅱにおける速読のための活動

(8) の質問については，現行英語Ⅱの教科書では明らかに速読の指導に適していない題材も含まれているため，常に質問項目①～③の言語活動だけで本文を十分理解できるとは限らない。コミュニケーション英語Ⅱの指導においては，内容によって速読を目標とするのか精読を目標とするのか一層の配慮が必要であると考える。また，③「各段落同士の関係について考えさせている」との回答数は28名中８名と少なかったが，平成23年度大学入試センター試験英語(筆記)において，大問６の問６のように本文の話の流れを最も適切に表す選択肢を選ばせる問題が出題されたことからも，制限時間内に各段落の要点を表す語句を探し出し，各段落の主題文を見つけ，各段落同士の関係について考えさせる活動を普段の授業の中で取り入れる必要があるのではないかと考える。

(9) 英語Ⅱの授業で，教科書本文の内容を精読させる活動について（複数回答可）(図12)

①語（句）単位で「いつ」，「誰が」，「どこで」，「何を」，「なぜ」に関する要点をまとめさせている。(16名)
②内容を把握するための英問英答を行い，事実や心情を把握させている。(15名)
③本文が全体として何について書かれているのか把握させている。(14名)
④本文には書かれていない，本文の続きを考えさせている。(０名)
⑤その他(２名)

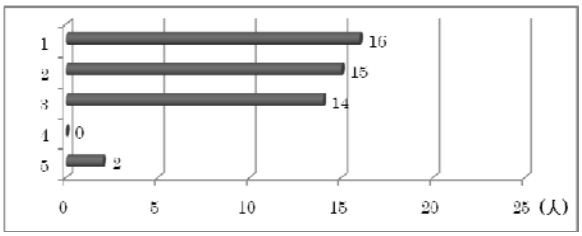
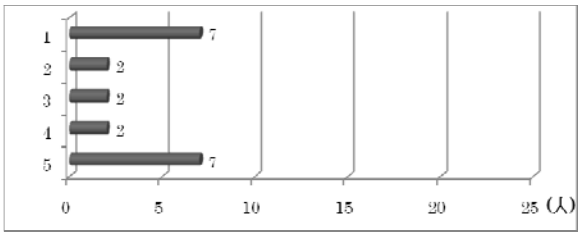


図12　英語Ⅱにおける精読のための活動

(9) ④「本文には書かれていない，本文の続きを考えさせている」との回答数は０名であった。物語等で結末が明記されていない場合，本文を学習した後，生徒が本文の続きを想像し自分の考えを表現する言語活動を取り入れることは，新学習指導要領に対応した授業を行う上で有効なのではないかと考える。

(10) 英語Ⅰ(図13)及び英語Ⅱ(図14)の授業で，ペアワーク・グループワーク等で行う活動について(複数回答可)

①日本語で本文に関する自分の考えを話し合わせている。(英語Ⅰ７名　英語Ⅱ10名)
②英語で本文に関する自分の考えを話し合わせている。(英語Ⅰ２名　英語Ⅱ２名)
③日本語で本文に関する自分の考えを書かせている。(英語Ⅰ２名　英語Ⅱ５名)
④英語で本文に関する自分の考えを書かせている。(英語Ⅰ２名　英語Ⅱ８名)
⑤その他(英語Ⅰ７名　英語Ⅱ６名)



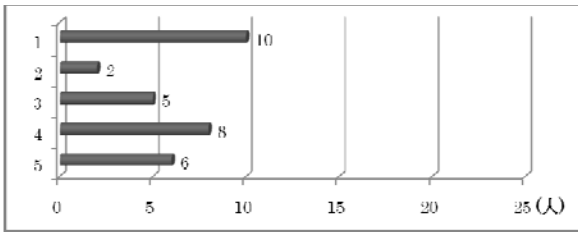
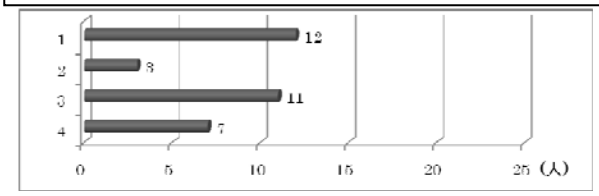


図13　英語Ⅰでのペアワーク・グループワーク　　図14　英語Ⅱでのペアワーク・グループワーク

(10)②「英語で本文に関する自分の考えを英語で話し合わせている」との回答数は英語Ⅰ２名，英語Ⅱ２名であった。また④「英語で本文に関する自分の考えを英語で書かせている」との回答数は英語Ⅰ２名，英語Ⅱ８名とあまり多くはなかった。平成20年１月の中央教育審議会答申の中で，「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となる指導を充実する必要があることが指摘された。そのためペアワークやグループワークにより生徒が自分の考えを英語で表現する時間を十分確保することで，「発信力」を育成する必要があると考える。

(11) 英語Ⅰ(図15)及び英語Ⅱ(図16)の授業でのALT の活用方法について (複数回答可)

①英語で本文の内容に関する質問をしてもらう。(英語Ⅰ12名　英語Ⅱ14名)
②生徒が板書した英文の指導をしてもらう。(英語Ⅰ３名　英語Ⅱ５名)
③グループワーク・ペアワークの際，活動の補助をしてもらう。(英語Ⅰ11名　英語Ⅱ14名)
④その他(英語Ⅰ７名　英語Ⅱ３名)



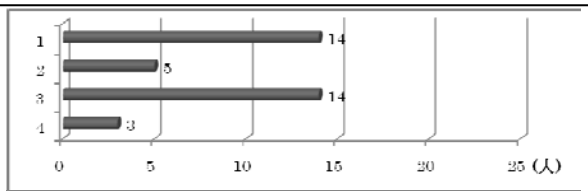


図15　英語ⅠにおけるALT の活用方法　　図16　英語ⅡにおけるALT の活用方法

(11)の質問に対する回答から，現行英語Ⅰ及びⅡの授業においてALT を積極的に活用しティームティーチングを行っていることがわかった。自由記述において，ティームティーチングを定期的に行い，自己表現活動を取り入れている例や，授業計画・指導・評価にいたるまでALT 主導による授業を週に一度行っている例についての記述もあった。また，ティームティーチングにおける具体的な活動例として，本文の単語の類推クイズ，既習の文法事項を用いての英作文，リーディングテスト，教科書とは別のコミュニケーション活動を行う等が挙げられていた。

(12) 英語Ⅰ及びⅡの授業の取組に関して，工夫している言語活動の主な例（表１）

表１　英語Ⅰ及びⅡの授業の取組に関して，工夫している言語活動について

英語Ⅰ	英語Ⅱ
・クラスルームイングリッシュの使用 ・フラッシュカードによる単語の反復練習と，そのカードを使用して物語の要約を組み立てる活動 ・*1ディクテーションにより，重要語句の定着を図る ・音読練習（*2チャンク読み，*3シャドーイング等） ・重要表現をペアで暗記 ・内容理解のために必要な文法事項の補足的な説明 ・ペアで和訳の確認 ・英単語の定義を英語で与え，本文中から探す ・英問英答や内容一致問題 ・ペアで互いにヒントを与えながら空所補充を行う音読活動 ・グループワークで行う英問英答や内容一致問題	・音読活動（*4四方読み，*5オーバーラッピング，シャドーイング，段落の暗唱等） ・*6クリスクロス ・テーマに関連した話題を提供することによって英語で意見を述べさせる ・意味の塊ごとに区切り，英語の語順で読ませる ・キーワードから本文の要約を組み立てる（再話） ・英問英答 ・和訳の先渡し ・各段落の主題文と支持文の確認作業 ・*7サイトトランスレーション ・段落の暗唱 ・ペアで互いにヒントを与えながら空所補充を行う音読活動

*1ディクテーション　英語を聞き，聞こえてきた英語を書き起こしていく。
*2チャンク読み　文法や意味に即して文の一部をスラッシュ（／）で区切り音読する。
*3シャドーイング　英語を聞くそばから，影のように後から追いかけて口に出し，同じように発音する。
*4四方読み　テキストの音読を終了するごとに，身体の向きを変え，４回目が終了したら着席する。
*5オーバーラッピング　英文を見ながら読まれている英文にかぶせて同時に音読する。
*6クリスクロス　任意の一列の生徒を起立させ，教師の質問に早く正解した生徒から着席していく言語活動。
*7サイトトランスレーション　英文を見ながら英語の語順どおりに頭から訳していくこと。

(13) 英語の言語活動は原則として英語で行うということに関する具体的な記述

具体的な記述から，回答者の多くが，原則として英語で行う言語活動について今後どう取り組むべきか，非常に関心をもっていることがうかがえた。授業をすべて英語で行うことで教師の話す英語を理解できず英語嫌いになることがないよう，教師の自己満足で終わらないように配慮したいという意見が多く出されるとともに，どのような場面で教師が日本語を話すべきかについての提案も数多く見られた。以下はその主なものをまとめたものである。

ア　授業で英語を使用する際，生徒の理解力だけでなく，教師の英語力も必要である。
イ　新学習指導要領に対応した授業の在り方について考えるための教員研修が必要である。
ウ　授業内の指示や言語活動はできる限り英語を用いるが，文法事項の解説や抽象的な概念を説明する際は日本語を使うこともあると思う。
エ　背景知識や日本語と英語の発想の違い等を扱う場合は，日本語を積極的に活用したい。
オ　新学習指導要領への移行にともなって，大学入試の在り方も変わるべきである。
カ　生徒が英語を聞いて文字に直せるような段階に達して，初めて効果的な授業になると思う。
キ　授業をすべて英語で行うためには，生徒の習得語彙を一層増やす必要がある。

３　「発信力」を育成するための言語活動を取り入れた授業の指導案

(1) アンケート調査に基づく現状分析から

教科書本文を読んだり聞いたりするといった活動や，既習事項の定着を図る言語活動について各学校の現状に応じた様々な取組がなされていることがわかった。その一方で，現行英語Ⅰの授業において，ワークシートを活用しながら各段落の要点をまとめているとの回答数はあまり多くなかった。また，現行英語Ⅰ及びⅡの授業において，自分の考えを英語で話し合うまたは英語で書く言語活動を実施しているとの回答数は，その他の言語活動と比べて少なかった。

本研究では，新学習指導要領に対応し「発信力」を育成するためには，ペアワークにおいて自分が英文を音読するとともに相手が読んだ英文を聞く活動を通して，最後にグループワークで本文の要約を英語でまとめる言語活動と，教科書本文の紹介文を読み，グループワークで意見を交換し，相手の意見に対し自分の意見を述べる言語活動が効果的なのではないかと考え以下の順で考察を行った。

(2) 生徒主体・活動中心の授業における教師の役割

松本茂(2010)は，「今回の学習指導要領は，『教師主体，説明・問題演習中心』から『生徒主体・活動中心』の授業への転換を強く求めている」と指摘している。Harmer（2001）によると，学習者中心の授業における教師の役割は，”a facilitator and a resource for the students to draw on”， つまり生徒の学習を促すために教科に関する専門的な知識をもって言語活動を進行する司会者のような役割であると述べている。

(3) ペアワーク・グループワークの長所と短所について（表２）

新学習指導要領に対応した生徒主体・活動中心の授業を行うためには，ペアワーク・グループによる活動を一層充実させ，積極的に活用する必要がある。Harmerはペアワーク・グループワークそれぞれの長所と短所について以下のように述べている。

表２　ペアワーク・グループワークの長所と短所について

	ペアワーク	グループワーク
長所	・生徒が発言する時間が十分に確保される。 ・自立的な学習が促進される。 ・教師に指名されて答える時，発言するときペアで何を答えるか相談することができる。 ・簡単な指示ですぐに行うことができる。	・生徒が発言する時間が十分に確保される。 ・人間関係によるトラブルはペアワークより軽減される。 ・さまざまな意見を出しやすい。 ・互いに協力したり交渉したりする技術を磨くことができる。 ・自分の到達度に合った形で活動に参加できる。
短所	・英語を使わず日本語で授業と関係のないおしゃべりが始まることもある。 ・ペアの相手より教師から教わりたいと考える生徒もいる。 ・ペアワークの活動相手が熱心でない場合，ペアワークが機能しないこともある。	・教師の注意が行き届かず，グループ内のすべての生徒が活動を楽しんでいるとは限らない。 ・グループ内で強い意見をもった生徒がいる一方で，意見の衝突を避けて消極的になる生徒がいる可能性がある。

(4) 生徒が主体的に学ぶ習慣をつけるために

ペアワーク・グループワークは従来の授業の課題をすべて解決できる万能の方法ではなく，短所もあることをここまで確認してきた。しかしながら，これらの短所があることを教師が十分念頭に置いた上でペアワークやグループワークを授業の中で継続的に取り入れるならば，Harmerが述べているように，生徒が自分たちの力で課題を解決することで自信を付け，授業後も自分たちの力で学習を継続することを促すことができるのではないだろうか。生徒が主体的に学ぶ習慣を授業で身に付け，一人でも多くの自立的学習者を育成するためにも，ペアワークやグループワークが有効であると考える。そこでペアワークやグループワークを取り入れた授業における言語活動について考えてみる。

(5) 英語Ⅰにおいてワークシートを活用し，ペアワーク・グループワークで要点をまとめる言語活動例について

卯城祐司(2009)は，再話の可能性と有益性について述べている。再話とは，「ストーリーを読んだ後に原稿を見ないでそのストーリーの内容を知らない人に語る活動」である。卯城が紹介したBenson and Cumminsによる再話の六つの形式と学習者の熟達度に合わせた再話の実施方法を参考にし，次のような学習指導案を作成した。

まず生徒は５～６人で一つのグループとなる。教科書本文を五～六つのパートに分け，グループ内で各パートを１人一つずつ分担する。次にグループ内でペア（Ａ，Ｂ）に分かれ，Ａが担当するパートをＢが音読し，Ａがワークシート１に語句を記入する。次にＢの担当するパートについて役割を交代し同様のことを行う。この活動終了後，それぞれ自分の担当する段落の要点を表わす英文をワークシート１に書く。制限時間内に英文が書けなくても，グループワークに移行する。ワークシート１を回覧し，グループ内で他の生徒と要約を共有し，教科書本文全体の内容を５～６行の英文でまとめワークシート２に記入する。自分の担当したパートが要約できない生徒がいた場合，グループの中で教え合うことによって制限時間内にワークシート２を完成させていく。グループ内で教え合うためにも，全員が予習の段階で事前に本文全体のあらすじをつかんでおく必要がある。制限時間を設けることで緊張感をもたせるとともに，授業時間内で理解できなかった部分を復習する必要性を感じ，主体的に自宅学習に臨むことも期待できる。以下は，その学習指導案である。

英語Ⅰ学習指導案(例)

・ 本 時 の 目 標 (1) ペアワークにおいて積極的に英文を音読するとともに，相手が読んだ英文を聞くことができる。
(2) 本文の要約を英語で５～６行程度にまとめることができる。

・ 本時の学習展開

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等	時間
導入	新出単語・語句の確認 教科書本文の音読	ペアになり，新出単語・語句を英語から日本語，日本語から英語に直す。 教師の後に続き，本文を音読する。 ペアになり，教科書本文を音読する。	新出単語・語句の発音及び意味を確認する。 本文の音読のモデルを示す。 制限時間を設定し，緊張感をもたせる。 ALT がいる場合は，音読のさせ方に変化をもたせる。		15分
展開	ペアワーク	ペアで相手と交代で読んだ英語についてワークシート１の空所を埋め，要点を図式化する。	本文を５～６箇所に分け，それぞれのペアに作業する部分を割り振る。	ペアワークにおいて積極的に英文を音読するとともに，相手が読んだ英文を聞こうとしているか。 (関心・意欲・態度)	10分
	グループワーク	ワークシート１に，要点を表す英文を一行書く。	制限時間を５分とし完成していなくても次の作業に移る。		５分
		グループのメンバーでワークシート１を回覧し，提出用のワークシート２に本文の要約を英語で５～６行程度にまとめる。	制限時間を15分以内とし，要点をまとめる上で行き詰っているグループに助言を与える。ALT がいれば一緒に助言する。	グループワークにより本文の要約を英語で５～６行程度にまとめることができたか。 (理解の能力)	15分
まとめ	発表	自分の完成させた要約に不足している情報があったら書き加える。	１名指名し要約を発表させる。 ALT の助言があればなおよい。		５分

・教師は次の時間までに提出用のワークシートにコメントと評価をつける。
・優れた作品はコピー等によりクラス全体で共有する。
・多くの生徒に共通して見られる間違いがあった場合は，その傾向の原因を探り，補足説明をする。

(6) 英語Ⅱにおいてペアワーク・グループワークにより自分の考えを英語で表現する言語活動例について

田中武夫・田中知聡(2009)は，リーディング指導の展開を，導入の段階，理解の段階，思考の段階，表現の段階の四つの段階に分けて考えている。次の学習指導案は，生徒が前時までに新出語彙の意味，発音の仕方を十分練習し，本文の内容を理解し，音読練習も十分終わった後に行う「表現の段階」での活動を想定している。本時において教科書本文の内容を復習し，自分の考えを英語で書いた後，グループワークで意見交換をする活動を取り入れている。また，英語Ⅰの授業で，(5)で示した授業の後に(6)の授業を行うことも可能である。以下は，その学習指導案である。

英語Ⅱ学習指導案(例)

・ 本 時 の 目 標 (1) 教科書本文の紹介文を読み，自分の考えに理由を付け加えて英語で書くことができる。
(2) 相手の意見に対する自分の意見を，理由を一つ付けて英語で書くことができる。

・ 本時の学習展開

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等	時間
導入	音読 （ペアワーク）	制限時間内に音読を終える。	ALT に協力してもらい，変化をつけて音読させる。		6分
	英問英答 （グループワーク）	グループ内で助け合いながら，本文の内容に関する質問に英語で答える。	英問英答を通して前回習った本文の要約をし，生徒が自分の意見を出しやすい状態にしておく。		10分
展開	自己表現活動１	制限時間内に自分の意見を英語で書く。そのように考えた理由を一つ付ける。	ALT の協力のもと，生徒が自分の意見を出しやすい部分を本文からあらかじめ指定する。	教科書の紹介文を読み，自分の考えに理由を付け加えて英語で書くことができたか。 (表現の能力)	7分
	意見交換１ (グループワーク)	相手の意見と，そのように考えた理由を聞き取り，ワークシートにメモする。	制限時間を示し，活動に緊張感をもたせる。理由を表わす表現の仕方で行き詰まっているグループに助言を与える。		15分
まとめ	自己表現活動２	グループ内で印象に残った意見を一つ選び，その意見になぜ賛成・反対なのか理由を一つ付けて英語で書く。	ワークシートには，自分の意見と，相手の意見に対する自分の意見を書かせる。ALT とともに活動の補助をする。	相手の意見に対する自分の意見を，理由を一つ付けて英語で書くことができる。 (表現の能力)	7分
	意見交換２ (グループワーク)	ワークシートを回覧して互いの意見を確認し合う。	ワークシートをグループ内で回覧させ，互いの意見を確認させた後回収する。		5分

・本時では，自分の意見と，相手の意見に対する自分の意見を書かせるところまでたどりつければよい。
・教師はワークシートを回収し，コメントと評価を付けて次の時間までに返却する。
・次の時間の導入で，グループのメンバーで互いの意見を口頭で発表し合う。

Ⅳ　研究のまとめ

県内県立高校（全日制）の英語の授業方法について，現状を把握する目的で実施したアンケート調査の結果を分析したところ，英語の授業は原則として英語で行うということに関する具体的記述において，生徒の実態や英語力等を考えると不安を感じているという趣旨の意見が多かった。太田光春（2009）は，授業で必

要となる英語は大きく分けて，指示や説明などの「授業をコントロールするための英語」，音声モデルとしての英語の先生による「手本としての英語」，生徒の言語活動が円滑に行われるよう「活動の手助けをする英語」，生徒の反応や発言に応えたり褒めたりする「フィードバックの英語」の４種類であると述べている。また，あくまでも生徒の「聞くこと」の能力や「話すこと」の能力を伸ばし，学習の動機付けをするために教師は英語を話すということを念頭に置いて授業を行う必要があるとも述べている。

本研究ではアンケート調査の結果を分析することで，英語Ⅰの授業ではワークシートを活用し要点をまとめさせる言語活動，英語Ⅱの授業ではグループワークにより自分の考えを英語で書く言語活動が，新学習指導要領に対応した「発信力」の育成に効果的なのではないかと考え，二つの学習指導案を提案した。生徒が与えられた課題をペアワークやグループワークによって自分たちで解決することで「発信力」を身に付けるとともに，授業で実際に英語を使うことで自信をもち，自宅でも自主的に学習を継続するための動機付けになるのではないかと考える。

最後に，向後秀明は，ALT とのティームティーチングによって英語を話すのが自然な雰囲気をつくり出し，より実質的な言語の使用場面を提供することができると指摘している（岡部・松本，2010）。そのため，授業中ALT が英語で話した後，それを常に日本人教師が日本語に直すことは極力避けることが大切である。

Ⅴ　本研究における課題

本研究はコミュニケーション英語Ⅰ及びⅡに関する授業の在り方の研究に終始し，「英語表現」の授業の在り方については言及できなかった。「コミュニケーション英語」と「英語表現」とを有機的に関連させた授業の在り方について今後の更なる研究の必要性を感じている。

また，浅羽真由美・J. Paul Marlowe(2010) は，「相互評価を正しく行えば，従来の教師評価の信用性を高めると同時に，学習者中心のクラスも実現可能である」と述べている。今回作成した学習指導案の中では，生徒がワークシートを回覧するだけであるが，生徒同士で間違いを指摘し合い，評価し合う授業の在り方について研究することの必要性も感じている。

＜引用文献＞

中央教育審議会　2008 『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』，p.110

文部科学省　2009　『高等学校学習指導要領（平成21年３月告示）』，pp.110-116

岡部幸枝・松本茂　2010　『高等学校　新学習指導要領の展開　外国語科英語編』，p.181　明治図書出版

Jeremy Harmer　2001 “The Practice of English Language Teaching”, p.57, Longman

卯城祐司　2009　『英語リーディングの科学』，pp.118-119,　研究社

浅羽真由美・J. Paul Marlowe　2010 ‘Using peer assessment in the language classroom’, “The Language Teacher January / February 2011 Volume 35, Number 1”, p.29, The Japan Association for Language Teaching

＜引用ＵＲＬ＞

アルク　2009　「英語の先生応援団- アルク高校教材編集部レポートVol.21～文部科学省教科調査官太田光春調査官のお話～」
http://www.gakko-oendan.com/staticpages/index.php?page=report090119　(2011.2.1)

＜参考文献＞

卯城祐司　2009　『英語リーディングの科学』　研究社

岡部幸枝・松本茂　2010　『高等学校　新学習指導要領の展開　外国語科英語編』　明治図書出版

田中武夫・田中知聡　2009　『英語教師のための発問テクニック　英語授業を活性化するリーディング指導』　大修館書店

Jeremy Harmer　2001 “The Practice of English Language Teaching”, Longman